「人肌」の音声電波媒体であるラジオを「ケア」という概念のもとに考察する

その具体的な実践を多様な事例で紹介

北郷裕美

金山智子 編
▶ケアするラジオ
寄り添うメディア・コミュニケーション
3・25判 四六判276頁 本体2600円
さいはて社

本書は、音声によって人を癒し、励まし、支え、寄り添うラジオについて、「ケア」という概念のもとに理念的考察しつつ、その具体的実践を多様な事例で紹介する、コミュニティメディア研究の第一人者である金山智子が監修し、5人の著名なメディア研究者の執筆者と、社会学者として高名な小玉美意子の特別寄稿が入る充実ぶりである。

以下話題に即して論点をまとめてみたい。

本書全体が1冊の理念構成になっている。

第1部では本書の理念的、学術的な立ち位置を確認する。「ラジオによるケア」ではラジオの持つ「親密性」を「ラジオによるケア」で論じられる。ラジオの双方向性は聞き手観的なコミュニケーションが生成されることに注目する。ケアとコミュニケーションの関係からラジオという音声メディアの考察を踏まえ、第Ⅱ部では「ケアするラジオ」の多様な実践報告をみていく。

さらに「ケア・コミュニケーション」がキーワードとして論じられる。ラジオの双方向性は聞き手観的なコミュニケーションが生成されることに注目する。ケアとコミュニケーションの関係からラジオという音声メディアの考察を踏まえ、第Ⅱ部では「ケアするラジオ」の多様な実践報告をみていく。

さらに「ケア・コミュニケーション」がキーワードとして論じられる。ラジオの双方向性は聞き手観的なコミュニケーションが生成されることに注目する。ケアとコミュニケーションの関係からラジオという音声メディアの考察を踏まえ、第Ⅱ部では「ケアするラジオ」の多様な実践報告をみていく。

奄美大島のコミュニティFM

2007年から2014年

主な目次

主な書評　3～6面

山本圭『娘姫論』（日吉信貴）
M・カンキマキ『眠れない夜に思う、憧れの女たち』（藤原玲子）
志村真幸編著『南方熊楠の生物曼荼羅』（唐澤太輔）
金山智子編『ケアするラジオ』（北郷裕美）
江川隆男『内在性の問題』（佐々木晃也）
暮沢剛巳『核のプロパガンダ』（長谷川一）
森元斎編『思想としてのアナキズム』（田中ひかる）
松山秀明『じまりのテレビ』（寺地美奈子）
川村陶子『（文化外交）の逆説をこえて』（芝崎祐典）
山本昭代『第二次世界大戦期東中欧の強制移動のメカニズム』（矢田部順二）
二本松康宏『旅訪信仰の変奏』（永松敦）
M・ベロッキオ監督『夜の外側』を観る
（小野沢稔彦）　8面

連載（弼川準二、殿島三紀）

一言で言うと「寄り添い支援」のことである。

その後スナー参加型の双方向性による「親密さ」と変化し、日本において1980年代の若者を中心に深く浸透組織のパーソナリティをアするの共同体化へと発展し定着するラジオ特性である。そこには親密さと同時に小さなリスクをとるような軽さという要素が付加されていく。

さらに「ケア・コミュニケーション」がキーワードとして論じられる。ラジオの双方向性は聞き手観的なコミュニケーションが生成されることに注目する。ケアとコミュニケーションの関係からラジオという音声メディアの考察を踏まえ、第Ⅱ部では「ケアするラジオ」の多様な実践報告をみていく。

奄美大島のコミュニティFM

2007年から2014年

刑務所ラジオ

刑務所ラジオとは受刑者のケア関係が発展することに注目する。ケアとコミュニケーションの関係からラジオという音声メディアの考察を踏まえ、第Ⅱ部では「ケアするラジオ」の多様な実践報告をみ